

「会う人、出会うもの、すべて我が師なり。」とはあの大作家吉川英治のことばです。尋常小学校中退というほとんど教育らしい教育は受けていない境遇を生きながら独学で学び、三国志、新平家物語、宮本武蔵など数多くの作品を残した人です。吉川英治にとっては人に会うというのは自分と比べるということではなく新しいことを教えてくれる先生、模範を見る良い機会だと捉えていたのです。もちろん、人が吉川英治に会った時はその人自身が多くのことを吉川英治を通して教えてもらっていたと思いますが。

クリスチャンもまた霊的に成長するためには、人の助けが必要です。聖書を読んで祈っていても、自動的に成長するかと言うなら、そんなことはありません。キリストに似た性質は、人間関係の中で育まれるものであり、孤立したままでは成長できません。特に霊的に成長するためには、良いお手本、模範が必要です。百聞は一見にしかずではありませんが私たちがより力強く成長するためには信仰を持って生きる人生がどれほど素晴らしいかを身をもって示してくれる生きた手本が必要なのです。私たちは「信仰の説明」ではなく「信仰を持って生きる模範」を必要としているのです。

パウロは、ピリピ教会の人々に宛てた手紙において、「兄弟たち。私を見ならう者になってください。」と言いました。パウロは信仰者たちに、自分に見習うようにと言うのです。この言葉は、少なからず、私たちに驚かせます。自分に見習う者になれと言うには、よほど自分に自信がある人でなければ言えないことです。そして、もし教会において、このようなことを語り出す人がいたとするならば、何と傲慢な人なのだと眉をひそめることでしょうか。そのように感じるのは、ただパウロのような立派な信仰者を見いだせないからではありません。そこには、キリストを見つめて歩むキリスト者が、キリストのお姿から、生き方を指し示されることはあっても、神様から見たら罪人に過ぎない特定の人を模範にして歩むことは信仰の姿勢としてはどうなのだろうかとの思いがあるのではないのでしょうか。しかし、私たちが忘れてはならないことは、信仰は具体的なものであるということです。それは、人々の実際の生活、生き方の中で示されていくものです。私たちは、自分一人で聖書を読み、聖書の知識を得ることによってのみ、キリストを知らされ信仰生活が整えられて行くわけではありません。私たちの信仰生活は、事実信仰に生きる人々、使徒パウロを始め、教会に連なり信仰に生きている信仰者たちの姿を模範（手本）とすることで整えられて行くのです。

一般的に、手本、模範と聞くと、私たちは、自分が目指すべき完成された姿を想像します。例えば、小学生時代の習字の授業の時のお手本を思い浮かべて見ると良いかもしれません。習字の教科書には、均整の取れた、美しい文字が記されています。生徒は、その見本と同じように書くことは、到底出来ません。けれども、少しでも、それに近づけるように努力し、練習するのです。そもそも弟子という言葉の意味はトレーシングペーパーを手本の上において字をなぞるということです。そうするとパウロも、これと同じような感覚で、自分が模範であると言っているのでしょうか。まったくそんなことはありません。確かにパウロは、人間的に見ても大変優れた人です。ユダヤ人としての超エリートの家系に生まれて、律法を熱心に守り、良い教育を受けていました。更に、キリスト者となってからも、使徒として誰よりも熱心に異邦人たちにキリストの福音を伝道したのです。そのような意味で、賜物を豊かに与えられた優れた信仰者に違いありません。しかし、そうであっても使徒パウロも、神様から見れば私たちと変わらず、不完全さを持った人間です。ですから、パウロはここで、自分こそ信仰者の完全な者であると主張して、皆、この私の完全な姿に極力近づけるように努力しろと言っているのではないのです。この言葉を語った時、パウロは、自分の歩みの素晴らしさや完全さを見つめてはいません。むしろ、自分の不完全さ、罪深さを見つめているのです。それを見つめながら、救いの完成を目指して走り続けているのです。そして、そのような姿勢にならえと言うのです。

更に、パウロは、ここで、自分の歩みだけが、信仰者の模範となるものだと言っただけではないことに注目したいと思います。17節の後半には、「また、あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。」とあります。ここでパウロは、自らを模範としている人にも目を向けるようにと言うのですが、ここでの記述が「わたしたち」と複数形で示されています。「わたしたち」と言われているのは、パウロの身近にいて共に歩んでいた同労者たちのことで、共にキリストに仕えていた人々のことでしょう。パウロは、自分と共に同じ信仰に歩んでいる人々、更には、その自分たちを模範としている他の人々にも目を向けるように言うのです。又、ここで「あなたがたと同じように」と言われていることにも注目したいと思います。このことから、既に、ピリピ教会の人々が、パウロや、キリストの救いにあずかる者たちを模範としている歩みをしていることが分かります。あなたがたは私たちを模範としている、それと同じように、私たちを模範としている他の人々にも目を留め、その歩みに倣いなさいと言うのです。即ち、信仰者の歩みとは、キリストの救いにあずかり、キリストによる救いを求めて歩んでいる者同士が、互いの歩みに目を留めて、互いを模範とし合うものだと言うのです。ここにこそ、信仰において教会という共同体が形成されることの一つの意味があると言って良いでしょう。パウロが、「皆一緒に」見習う者になれと言っていますが、信仰は個人的なことではありません。個人が修練して、お手本に近づいて行くと言うのではなく、教会に集められた人々が、共に模範とし合うことによって、育まれて行くのです。

パウロは、信仰者が、自分が完全でないことを知らされて走り続ける姿を示しつつ、自分に見習う者となれと言うのですが、このようなことを語るのは、ピリピ教会の中に信仰における完全さを主張する人々がいたからです。そのような人々に対して、パウロは、人間は、自分の業や、自分の行いによって、救いを獲得することは出来ない。信仰とは、自分の不完全さを知らされて、神様の救い、神様が救いの御業を完成させて下さることを求め続けて行く歩みをするのだと言うのです。人間が、自分の行いや、熱心な信仰生活、信仰歴、自分が学び取った聖書の知識等、即ち、自分が内側に獲得したものによって自ら救いを得ていると思う時、自分の力で信仰的にしっかりと立とうとする時に、神様の救いを完全に得ていると主張する人々と同じ態度に陥るのです。

パウロは18節で、信仰者を模範とし、目を向けなくてはならない理由を語ります。「というのは、私はしばしばあなたがたに言って来たし、今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。」とあります。ここで、自らの完全さを主張する者は、キリストの十字架に敵対する者と言われています。キリストの十字架と言うのは、神の一人子が、十字架で死ぬことによって人間の罪を贖って下さり、終わりの日の救いにあずかることを約束して下さったという恵みの出来事です。自分自身の獲得したものによって救いの完全さを主張することは、キリストの十字架の救いにあずかりつつ、キリストが約束して下さっている、救いの完成を拒むこととなります。救いの恵みを無にするということによって、十字架に敵対することになるのです。ですから、ここで十字架に敵対する者とは、教会の外にいる人々のことではありません。この言葉は他でもなく、教会にいる人々に向けられているのです。実際にキリストの十字架を知らされ、それにあずかる者とされていながら、その恵みに生かされることが無くなってしまふことがあるのです。キリスト者とされていながら、その歩みが本当にキリストの救いの恵みにあずかって行くことではなく、自分の信仰の熱心さや教会生活に打ち込む姿勢によって自分の救いの完成を主張しようとする歩みをしているのであれば、それは、キリストの十字架に敵対しているのです。そんなつもりではないと言っても、やっぱりそんなつもりなのです。パウロは、ここで、「私はしばしばあなたがたに言って来たし、今も涙をもって言うのですが」と語ります。ここから、ピリピ教会の事態が悪化していることが分かります。つまり、ここで見つめられている間違っただけの姿勢は、教会にお

いて根強く現れて来るものなのです。そして、敵対する者が多いと言われているように、私たちの誰しも、ここで語られている、完全さを獲得する信仰の姿勢に陥ることがあるのです。

パウロは、キリストに敵対して歩む人々の、信仰の姿勢の本質を、19節で見つめています。「彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです」。彼らは、真の救いに至らせる主なる神ではなく、自らの欲望を神としていると言うのです。欲望は誇りや自信と言えます。そして、そのような歩みは、実は、恥ずべきもの、本当に人間を救うことが出来ない、過ぎゆく一時的なものを誇りとしているのです。そのような滅び行くものを誇りとする人々は、結局は、「この世のことしか考えていない」のです。この世を超えた所にある救いに目を向けていないのです。

パウロは、そのような信仰の姿勢を退けつつ、20節では次のように語ります。「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます」。自分の完全さを主張する人々が、この世に結びついているのに対して、教会の信仰に生きる者は、天と結びついていると言うことです。国籍と言うのは、私たちがこの世で生きていくために不可欠なものです。近代社会においては、国家が、共同体の単位を形成していますから、国籍は、まさに、自分が、一つの共同体の中で生きていることのしるしであり、自らのアイデンティティを示すものなのです。だから、実にしばしば、人間は、国に自らの誇りを見出そうとし、妙な愛国心が出てきたりします。

ここで国籍は天にあると言うのは、信仰者は天に属し、それ故に、アイデンティティは地上にではなく天にあるということです。それは言い替えれば天にある救いを自らの救いとし、誇りとしているということです。この世においては、未だ完全な救いに与ってはいない。キリストが救い主として神の右の座についておられる所にこそ、真の救いがあるのです。そして、将来、「そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを」待っているのです。将来、終わりの日に救いに与ることを待望して歩むのです。21節では、次のように語られます。「キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです」。その終わりの時、キリストが働いて下さり、死に定められている罪の支配の中にある体が、主イエスの復活の体に変えられるのです。自らの不完全さを知らされつつも、この救いの完成を待ち望みつつ走り続けるのです。

国籍が天にある者の歩みは、自分を見つめ、自分の完全さを主張し合うのではなく、不完全な者が神様による救いを求めつつ礼拝を捧げて行く群れの中で進められていくのです。

だからこそ、パウロは、自分自身に見習う者となれと言うのです。4章の1節には、「そういうわけですから、私の愛し慕う兄弟たち、私の喜び、冠よ。どうか、このように主にあってしっかりと立ってください。私の愛する人たち。」とあります。

パウロは、決して、自分の完全さを誇示して、それに見習う者となれと言っているのではありません。不完全な者が共に、完全であるキリストの救いを求めて行く者となる道を示しているのです。パウロは、最後に、「どうか、このように主にあってしっかりと立ってください。」と語ります。自分の力によって立ち、共に、主によってしっかりと立つことこそ、パウロが言おうとしていることなのです。自分に目を向け、自分の中に救いの確かさを見出そうとしていく歩みは、自分自身の小さな誇りを保つための信仰生活になるでしょう。そこには、真の交わりは生まれません。天にある救いを見つめ、キリストのみを誇りとする時、同じ救いを求める者としての真の交わりが形成されていくのです。自分を誇りとするのではなく、ただ、キリストを誇りとし、キリストによって約束された救いの完成を求める人々の姿を模範として行く中で、私たちは、自分の力によってではなく、主によって立つ者とされて行くのです。